



生活やものづくりの学びNetニュース

第8号

2014年7月発行

巻頭言 ミシン事業者としての誇りと夢

蛇の目ミシン工業株式会社 顧問 江端 美和

1. ミシン事業に携わるものの誇り

ミシンの歴史を紐解くと、ミシン事業は常に逆境の中にありました。ご存知のように18世紀半ばイギリスから始まった「産業革命」の発端は紡績機と織機の発明であり、衣服や布製品を大量に要求する社会的要望への対応でした。「産業革命」は紡績機、織機はもちろんのこと他の産業分野でも工場大量生産を可能にし、社会の技術、経済基盤を飛躍的に向上させました。しかし、縫製の機械としてのミシンは紡績機、織機と同時期に当然のごとく要望されながらその要望に答えられず、縫製工場でミシンが実際に稼働され始めたのは「産業革命」が既に安定期に入ってしまった19世紀後半になります。このことから、内燃機関に代表される「産業革命の花形」である各種機械に比べられ、ミシンはその創世期から「産業革命の失敗作」と揶揄される逆境からのスタートとなりました。

この結果、紡績機、織機の発達で布が大量に生産されるようになりましたが、縫製工場の生産効率が悪く生産が追いつかない、いきおい、家庭の中で主婦が衣服の生産を担当するようになったことは容易に想像ができます。

気がつけば、家庭の中での主婦の仕事であった紡績、織りの作業は工場に持っていかれ衣服製作だけが残り、縫製は家庭内における数少ない製品生産手段として貴重な作業となっていたのです。このような状況の中で、ミシンは工場規模での生産性を上げるには不十分な機械であったけれども、家庭内規模での生産において労働の負荷を軽減するに十分すぎる重要な機械となりました。

衣・食・住は人間の文化と生活を担う最も基本的な三要素ですが、衣文化が家庭内に残ることにより家庭内文化における衣服製作の重要性が増し、ミシンがその大きな担い手として、女性の経済的基盤を創出し、労働負荷軽減により余暇を生み、女性の地位や権利の確立に大きな役割を果たしてきたことはミシン事業に携わるものとして大きな誇りであります。言い換えると、「ミシンは、文明は造れなかったが、文化を創出してきた」社会性は我々ミシン事業者の大きな自信でもあります。

2. ミシン事業に携わるものの夢

ミシンがその歴史の中で文化を創出してきた誇りについて述べてきましたが、世界の中では、現在も尚、家庭内文化の発展が進行中の地域もあります。しかし、一方で、日本に代表されるように、ミシンが家庭内文化を発展させる重要な役

割、即ち、家政における経済基盤を構成するための役割、女性の地位や権利向上の助成を担う役割は終焉を迎えようとしている地域もあります。

このような状況の中で、ミシン事業に携わるものの夢は、ミシンが新しく創出される文化に重要な役目として関わってゆきたい、もっと端的な言い方をすれば、もう一度、ミシンが新しい文化を創出することにあります。それは「ものづくりの文化」です。ここで言う「ものづくりの文化」とは、決して物を作ることにより物質的豊かさを求めることではありません。ものをつくることを通し、誰でもが持っている創造力を具現化させることによる心の豊かさを培う、また、作られたものを通して、人と人とのコミュニケーションを強固なものにする文化です。

このような心の豊かさが実感される文化、人と人とのふれあいが深められる文化の中で、ミシンが必要不可欠なものとして価値を持ち、その中に蛇の目ミシン工業が企業として自然体で存在している世界を理想としてイメージしております。

たとえば、刺繍や日本でのキルトは作家がいて観賞される、言ってみれば、作家の感性と製作技術が評価される「芸術」の領域にあります。しかし、これを誰でもが簡単に製作でき、容易に自分の感性と創造力を表現できるものとなったなら心の豊かさが実感できるものとなるでしょう。私は、ミシンにはそれをできる可能性があると感じています。言い換えると、ミシンは「芸術」と呼ばれる領域を、「文化」という領域へ変換できる要素を備えていると考えています。

また、ある調査機関による「洋裁の実態調査」に出ている30代のお母さんのご意見に、「子供が『ママが作ってくれたの!』とお友達に自慢げに言っている姿を見ると作って良かったと思います。」というのがありました。まさに「ものづくり」が物質的豊かさを獲得する手段ではなく、親子のコミュニケーションを強め、友達同士のふれあいを深める価値を創出していることを物語っています。現代において、このようなことが文化として根付くことが必要と感じているのは、私だけではないでしょう。

もとより、新しい文化の構築は1年、2年のスパンではできない、5年、10年のスパン、いや50年の時間を必要とされるかもしれない。しかし、私はミシン事業に携わってきた先人たちの業績を誇りと自信に、ミシンの新しい価値創出に夢と希望を持ちたいと思います。

生活やものづくり学びネットワーク実行委員会 開催のお知らせ

実行委員の皆様には大変お世話になっております。昨年度から、各県毎に、学習交流会を開催していただき、本ニュースでも各地で活発に行われた学習交流会の様子をお知らせすることができましたのも、皆様のおかげと感謝申し上げます。

さて、これまで年数回行っていましたが、今年度は各県の取り組みを中心にさせていただきました関係上、全体の会をまだ開催しておりません。総会に会わせて、今年度の実行委員会の開催をさせていただきます。年に1度の開催といたしますので、万障お繰り合わせの上、ご参加くださいませよう、お願い申し上げます。

日時 2014年9月28日(日)12:30~13:30

場所 聖心女子大学宮代ホール

- 議題
1. 各県の学習交流会の取り組み計画
 2. ロビー活動について
 3. ニュースレター、メーリングリストでの情報交換の課題
 4. 実行委員会運営上の課題
 5. その他

生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会報告

2014年3月29日13:30~14:30 於キャンパスプラザ京都

1. 参加者：21名の中高を中心に現職の教員、学生、大学の教員
2. テーマ：明日の授業に役立つ家庭、技術・家庭科の検討—技術・家庭科の実践紹介を手がかりに—
3. 研修の概要

前半は2名の教員の授業実践の提案、後半はコメンテーターの講評と参加者との意見交流、前半の司会は鈴木真由子氏（大阪教育大学）、後半は沼口博氏（大東文化大学）

(1) 授業実践及び教材の紹介

①技術分野「袋で大根を栽培する—大根の葉を料理する—」
赤木俊雄氏（大東市立諸福中学校）による技術分野の生物栽培の指導経験を資料に基づいての講演、最後に参加者で教え子の学生の授業を受けた生の感想が入る。

主な内容は栽培の学習をどのように進めてきたかを具体的に紹介、校内の空き地の利用、玄米袋を取り寄せ、全生徒1袋配布活用、4年間同じ袋を再利用。学校では大根の間引き菜や葉の料理、家庭に持ち帰らせ料理に使うよう働きかけた。栽培学習の位置づけの難しさや管理の仕方等指導者と生徒との信頼関係で乗り切ってきたという。

②家庭分野「かしこい消費者になろう—福島のお米を買いま—すか—」

岡崎紀子氏（大阪市立此花中学校）は東日本大震災の福島原発事故を受けて大教大附属中学校で授業を構築された。附中では40名の生徒を2つに分け20名ずつで技術と家庭を同時に進めているという。

本授業は生徒にアンケートをとりそれを元にグループでの話し合い活動や発表をし、生徒に様々な視点で消費者教育を考えさせた。福島のお米を買うのと食べるのとは別問題という生徒の感想が印象的であった。現在は公立中学校に移り生徒指導に追われる毎日でこうした授業実践はなかなか難しい。

(2) 授業実践から学び、考える

2人のコメンテーター（家庭科分野 野田文子氏（大教大）と技術分野 綿貫元二氏（守口市立梶中学校））からそれぞれ専門以外の実践報告についてコメントをもらう。

① 野田氏による技術科「大根の実践」のコメント

土に触れ栽培して食べていくというのは人間の原点でスケールの大きな教育を感じている。赤木さんは「農と食を結ぶ」と話されたが食べるために栽培するのだから「食と農を結ぶ」ではないか。生物の育ちを考えると授業経営が難しいと思われる。ご自身の考えをもっていかなる条件でも続けてこられたことに感銘を受ける。

② 綿貫氏から「家庭科の授業実践」へのコメント

ものをつくる技術科と言う立場からは消費者だけでなく生産者の立場の視点も必要である。テレビのCMなども購入を促すと言う点では生産者の視点である。広島は1回きりの爆発で終わったが、今なお苦しんでいる福島は現在進行形で放射能が出ておりこの先の見通しもない。消費者には不安材料の情報は流れない。自分の生活は自分でつくるという視点が大切、ただ買うだけでなく自分でつくって生活することを考えさせたい。



③ フロアーとの意見交流を終えて

現場教員の声から、それぞれ工夫しながら栽培や調理実習を行っているが、時間数減少の問題や職場の教科への理解不足、栽培の適時性とカリキュラムの問題等々課題が出された。

今回参加教員は少なかったが、研修に出にくい現状もあるようで、技術分野や家庭分野の教員の実態も厳しさを増しているようである。

こうした制度上の課題に真っ向から立ち向かうのはかなり困難であるが、どの教員も生徒にとって意義ある教科なので、学びの充実に向けて力を尽くしたいという熱意が会場に広がっていた。

（文責 流田 直）

1. 山形県の活動報告

現在、山形県の「生活やものづくりの学びネットワーク」の会員は、中学校教員3名、高校教員5名、大学教員3名、高校退職教員1名の計12名です。居住地域は広範囲にわたり、集まるにはなかなか困難な状況です。

そこで、今年度の活動は、定期的に開催している勉強会である「中学校家庭科自主研究会」（山形市周辺と県北の新庄市周辺の会員）が実施する研修会と共催にして実施しました。実施内容は、2013年10月5日、県北の金山町「暮らし考房」*において藍染と石窯によるピザ焼き体験を行いました。

「暮らし考房」は山形県金山町の山奥の小さな集落にあり、山村の豊かな暮らしを考え、体験し、宿泊できる場を提供したいと始められた栗田夫妻の活動拠点です。地域特産物マイスターとして活動する傍ら、イタヤ楓の樹液を原料に国内唯一のメープルサップやシロップ、メープルビールなども作り、「メイプルの里づくり」にも取り組んでおられます。妻の栗田キエ子さんは、農林漁家民宿おかあさん100選に選ばれています。

藍染めは、栗田さんが自宅の畑で育てたタデ藍で「すくも」作りから自分でされており、寒い地域ですので藍が発酵する時期だけの作業となります。私たちはそれぞれハンカチやスカarfに思い思いの絞りを入れ、藍瓶に漬けては空気媒染の作業を3回繰り返し、最後は裏山に流れる小川の水にさらし、乾燥してできあがりです。乾くのを待つ間にピザ作り。生地は夫の和則さんがこねて寝かせておいて下さり、栗田さん家の採れたて野菜をのせて手作り石窯へ。食べる頃には藍染めも乾き、絞りの糸をわくわくしながら解き、お互いの作品を鑑賞しました。食事の時間には冷えたメープルサップもごちそうになり、少々焦げたところもあったピザに舌鼓を打ちました。

家庭科の時間が少なくなり、選択の時間があれば、昔ながらの素朴な絞り染めや藍染めができることや、衣生活にしても食生活にしても素材が見えにくくなっている時代に体験させる意義を語り合いました。なお、この活動で4名の新会員ができました。

(高木 直)

*<http://www.town.kaneyama.yamagata.jp/shizen/kurashi-kobo/>



2. 千葉県の活動報告

生活やものづくりの学びのネットワーク千葉では、2013年度の活動として、2014年3月22日(土)に家庭科の一授業手法として、ファシリテーションの手法を学ぶワークショップと、ファシリテーションを取り入れた家庭科の授業実践紹介を含めた学習交流会を開催した。19名の参加申し込みがあり、当日の出席者は計17名であった。出席者は、千葉県会員、東京会員であった。ネットワークの活動の宣伝も兼ね、千葉県会員から会に所属していない方に学習会の広くお知らせしていただき、会員以外の方の参加もあった。また、千葉県の教員になる予定の千葉大学の院生などにも積極的に参加してもらった。

学習交流会の内容は、家庭科の授業に活かすアクティブラーニングについて、ファシリテーションとロールプレイングを中心に引き上げ、ワークショップ形式により参加者が実際に体験しながら指導法について考えるというものであった。千葉大学教育学部教授の久保桂子先生を講師として、最初にアクティブラーニングやファシリテーションについての概説をいただき、ファシリテーションの実際を学ぶために「生活に不可欠な『機能』、生活行動を考える」ワークショップを行っていただいた。

ワークショップ終了後には、参加者全員で意見を共有し、ワークショップを振り返る活動を行った。それぞれのグループがそれぞれに異なる考え方や価値観、表現方法を持っていること、多様性を共有し理解することが大事であるという学びを得た。また、少しの時間ではあったが、ロールプレイングについても体験的に学ぶことができ、交流会も兼ねた充実した学習会となった。

3時間のワークショップを設定したが、参加者からは、もっと活動の時間を取ってもらいたかったという声もあり、交流会の内容、会の活動のあり方も含めて今後検討していきたい。

(千葉大学 中山 節子)

3. 東京都の活動報告

東京実行委員会は2013年8月から始動した。まず、放射線家庭科授業研究会との共催で2013年11月24日(日)午後2時~4時半まで、東京学芸大学で講演会を実施した。講師は吉野裕之氏(子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク、NPO法人シャローム災害支援センター)で、演題は「福島の子も達や家族のことなどを聞く」で、参加者は40名であった。被災地で、今、必要とされる子ども支援とは主に次の5つである。

- ① 現状把握・・・子どもの生活を反映した放射線量把握「地上50cmでの測定」
- ② クールエリアの獲得・・・線量把握に基づく対策「通学路除染など」
- ③ 自然体験・・・制約なく自由に遊べる環境「リフレッシュ」

キャンプなど」

- ④ 健康被害の未然防止・・・予防原則に立った健診「甲状腺以外にも拡大」
- ⑤ 選択可能性の保持・・・選択のバリエーションを確保「避難や疎開を含む」

これらの支援によって、子どもが自分の力で健やかに成長発達できる『子ども期』を確保するための、自然環境、社会環境、精神環境の3つを整えることができるだろうと結ばれた。さまざまなデータも提示され、未だに福島ではつらい状況の生活を強いられていらっしゃる状況が知られて、会場は深刻な思いに包まれた。

次いで、2014年2月11日(火)午後1時半～4時に聖心女子大学で「子どもたちの実態をふまえた生活やものづくりの教育を一緒に考えませんか」というテーマで学習交流会を開催した。話題提供者は沼口博氏(大東文化大学)、「北欧の職業・技術教育に学び、日本のこれからの技術・職業教育を考えるーフィンランドにおける新たな職業訓練・訓練制度の試みについて」、小池久夫氏(川崎市立中央支援学校)「英語教員から家庭科教員に 家庭科のおもしろさとは?」、坪内恭子氏(都立白鷗高等学校附属中学校(非))授業研究「一人暮らしでどのくらいお金が必要か」、「社会保険ゲーム」で参加者は25名であった。これらの研修会の企画等のために、2013年度は実行委員会を5回開催した。

2014年度は、地域の生活やものづくりの学びを支援するために、学童クラブ等での夏休みの企画を立てている所である。(東京実行委員会代表 亀井佑子(愛国学園短期大学))



学習交流会風景

4. 神奈川県活動報告

2013年度には、神奈川県下の家庭科教員を中心としたネットワークの構築のために、フェイスブックページ「生活やものづくりの学びネットワーク神奈川」を開設しました。これまでの経緯は、以下の通りです。

まず、11月3日(日)に第1回神奈川支部設立準備会を開催しました。当日は横浜国立大学家政教育講座関係者および事前のメールによる参加呼びかけに対し応じた会員が参加し、神奈川県下で今後、どのような活動を展開していくか話し合いました。その際、首都圏にあり複数の家庭科教育関連団体が存在している中、新たにネットワークの活動を行う上で、どのようなニーズがあるのかを把握する必要性が確認されま

した。このときの議論を受けて、12月3日(火)に神奈川県下の会員に対する今後の活動に関する要望等を尋ねるアンケート調査を郵送で実施しました。

1月25日(土)に、第2回設立準備会を開催し、アンケートの結果を踏まえ、フェイスブックを通して多数の家庭科教員とのネットワーク構築をめざすことに決定し、3月25日(火)にフェイスブックページの開設に至りました。

現在、フェイスブックページには家庭科の教材として役立つ情報やイベントなどが随時掲載されています。まだ閲覧者はあまり多くはありません。フェイスブックに参加している会員がそれほど多くない、ということが原因となっているのかもしれませんが、今後の家庭科教育の発展を考えたとき、フェイスブックやツイッターなどのSNSサービスをどのように有効に活用できるかが、大きなカギを握っていると思います。大学生はもとより、中学・高校生にとってSNSが人間関係を繋ぐ不可欠なツールとなっている現在、私たち教師も、その可能性と課題をともに自覚しつつ、有効に活用していきたいものです。ぜひページを訪問し、「いいね」をクリックしていただければ幸いです。今後、情報ネットワークをともに作っていくメンバーが増えていくことを期待しています。(神奈川県実行委員 堀内かおる)



5. 長野県の交流会報告

2014年3月15日(土)、信州大学教育学部で、子どもと教師の心を安らげ、学校を彩る生花で美しいコサージュを創りましょう。英語にも慣れ、国際的なコミュニケーション力をアップしましょう。というねらいで交流会を開催いたしました。日本語・英語・中国語で作り方プリントを作成しました。

楽しくコサージュを創りながら
外国語にも慣れつつ
情報交換もしました

講師には、家庭科がご専門で、華道歴豊富な長野県小海高等学校校長で、県家庭科教育研究会の会長でもある大井美富子氏とアメリカ出身で、高校時代九州に交換生徒として1年間、さらに広島市にも居住経験をお持ちで、現在は長野市国際交流員としてご活躍のナタリ・ネルソン氏のお二人をお招きしました。

会費はお花代を含めて800円、持ち物は、はさみ、カッター、新聞紙1日分、ゴミ袋、作品持ち帰り用の袋、エプロン、筆記用具などとししました。一人分(1個分)の材料は、生花(デンファレー花1本、アイビー葉数枚、パール玉、リボン、針金、造花用テープ、安全ピンなどでした。参加者は女性7名(高校教員3名、中学校教員2名、大学教員1名、学部4年生1名)でした。終了後の参加者の感想として、次のようなものが寄せられました。

日本語と英語の説明を聞きながら、まあいいかとあまりこだわらず作りましたが、すごく素敵になりました。(高) ・生花ならではの華やかさがあり、心が癒されました。クラブに授業に活用できそうです。(高) ・心豊かに過ごせる時間を頂き、ありがとうございました。二重三重の工夫のある内容を用意していただきました。(高) ・普段ほとんど何かを作るという時間がありません。今日は落ち着いて取り組めて嬉しかったです。うまくいかなかった時の生徒の気持ちを考えようと思えました。(中) ・卒業式や入学式前という時期的に合って素晴らしい企画と思います。英語も時代に合っていて本当に良い講習だと思います。いろいろ参考になりました。(中) ・スキットではない自然な英語らしい英語、しかも大変に美しい英語を聞くことができ、さらに飾って楽しく、身につけて楽しい素晴らしい作品が出来上がりました。(大) ・デンファレの花は、ほとんど大きめのを使ったので、ゴージャスになりました。(4年生)



お二人の講師の連携がぴったり



英語の説明を聞きつつ、手を動かす素敵な時間



(約タテ 15cm×ヨコ 10cm)

それぞれの作品を展示して鑑賞しました。同じ材料ですが、それぞれ個性が出ていて、見応えがありました。

このような素敵な会を実施できましたのも、本会からの補助のお蔭です。心より感謝申し上げます。今年度もまた、一層有意義な活動を計画したいと考えております。

(長野県代表委員 信州大学教育学系 福田典子)

6. 静岡研修会の報告

静岡では、ネットワークの会員を中心に10月ごろから企画についての相談を開始すると共に、様々な機会に県内の小、中、高等学校の家庭科教員に広く参加を呼びかけることに努めて、開催に至りました。

研修会の概要は下記の通りです。

準備はまず、消費者教育の分野で全国的に活躍されている静岡大学の色川卓男先生が研修の中心となる講演を快く引き受けて下さったことからスタートしました。しかし、小、中、高等学校の多くの家庭科教員に集まってもらうためには、それだけでは十分ではありません。やはり、同時に小、中、高等学校での授業実践の成果を聴いて交流できることが貴重であろうと考えました。ただし、実践発表担当者を決めるのはなかなか大変でした。中学校については、ちょうど昨年度、静岡で開催された「東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会」に向けて数年頑張ってきた研究グループがあり、その代表である内藤博美先生が引き受けて下さいました。小学校は、平成24年度に県内島田市教育研究会で実践発表された五藤香子先生に引き受けていただくことができました。最後まで決まらなかったのは高等学校の実践報告者です。昨今の「家庭基礎」2単位の中では、消費生活の授業はなかなか実践できないということが背景にあるように思われましたが、ぎりぎりになって若手の朝比奈玲子先生が引き受けて下さいました。

研修会への参加者は計24名(小学校2名、中学校5名、高等学校9名、大学4名、その他4名)でした。日程が正月休み明け早々で、附属学校の入試日と重なったという条件の中でしたが、多くの先生が集まって下さいました。会の最後に、参加者には感想を書いていただきましたが、皆さん共通して消費者教育についての理解が深まり実践意欲が高まったこと、小、中、高等学校の家庭科教員が一堂に会して研修できたことについて高く評価してくださいました。しかし、講演と3件の実践発表に対して午後の3時間しか予定しておらず、ワークショップの時間を確保出来ずに意見交換で終わってしまったことから、もっと交流を深める時間が欲しかったという感想が多く出されました。今後もこのような機会が年1回程度あると良い等の意見を多く頂くことが出来、企画した私たちも「また来年も」と意欲を持つことができました。

「生活やものづくりネットワーク」静岡研修会

日時：2014年1月11日(土曜日)13時半から16時半

会場：JR東静岡駅前グランシップ 1003会議室

テーマ：「賢い消費者」から「消費者市民」へ

講演：色川卓男先生 「『消費者市民』を育てる消費者教育」
実践報告と意見交換：小・中・高のつながりのある消費者教育実践報告者

小学校：(元)島田市立大津小学校 五藤香子先生

中学校：藤枝市立西益津中学校 内藤博美先生

高等学校：静岡県立藤枝西高等学校 朝比奈玲子

(小川裕子、小清水貴子(静岡大学))

7. 滋賀県の研修会報告

滋賀県では、2014年3月15日(土) 滋賀大学大津サテライトプラザ会議室において授業実践交流会を開催しました。内容は「中学校技術・家庭科(家庭分野)の授業実践について」で、参加者は6名(中学校3人、高等学校1人、県教育委員会1人、大学1人)でした。滋賀県近江八幡市立八幡中学校の前川順子先生に講師をお願いし、「自分の消費活動が環境に大きな影響を与えることを知り、持続可能な社会の実現を目指そうとする意欲を高める」ための題材「環境に配慮した消費生活の工夫」をはじめ、中学校技術・家庭科(家庭分野)食分野における授業実践を紹介していただきました。それらの報告をもとに参加者で意見交換を行いました。意見交換では(1)生徒の生活実態の変化が著しく、それに合った学習題材とは何か、(2)家庭の中で伝えられていることと伝えられなくなったこと、学校教育の中で子どもたちに伝えなければいけないことは何か、(3)中学校・高等学校とも授業時間数が減少する中での実習時間の確保と実習題材の選択について、(4)安全に調理実習を行うための方法や注意点、(5)地域の方と連携した授業作りにおいて子どもの力を伸ばすための工夫と注意点、などについて話し合われました。

参加者が自由に気軽に自分の意見を言える雰囲気の中で授業実践について交流することができました。参加者は、中学校・高等学校・大学教員、公立学校と私立学校、行政など、立場は多様でしたが、普段同じ校種の中での研究会が多い中で、他校種の実情を知ることや異なった立場からの意見や考えを聞くことができ、大きな刺激を受けました。また、授業についてだけではなく、家庭科教師としての日頃の悩みや迷いについてもお互いにアドバイスをし合うことができ、有益で楽しい時間となりました。家庭科の大切さを子どもたちに伝えるだけではなく、学校内の他教科教員や管理職、保護者、地域の人々にも伝えていくことの大切さについては、参加者全員が同じ思いを共有しました。

(滋賀県実行委員 矢野由起)

8. 兵庫県の学習交流会報告

兵庫県内に在住の「生活やものづくりの学びネットワーク」にご賛同いただきました皆さまとの学習交流会を以下のように実施しました。

日時：2014年2月7日(金) 11:30~15:00

場所：兵庫県西脇市(梅吉亭および西脇高等学校)

参加者：5名。

まずは、西脇高校生活情報科生徒による梅吉亭ランチ活動の取り組みを参観しました。梅吉亭はシェフが日替わりのお店です。<http://www.umekichi-tmo.jp/umekichitei/>ここで、西脇高校生活情報科の食物専攻の生徒がシェフとなり腕を振るいました。材料の仕入れから調理、セッティング、片付け、店内の雰囲気づくりなどすべてを高校生が企画・運営しました。高校生シェフが身に着けていたエプロンも被服専攻の生徒が手作りました。私たち兵庫県内のネットワークメンバーは、生徒たちの活動の様子を参観しながら食事を味わいま

した。一般市民も含め多くの来客が訪れる中、味もおもてなしも素晴らしく、参加者一同感激しました。

また、同時に隣接する「来住家住宅」に障がいの方やその支援者の方々をランチにお招きし、西脇高校生活情報科の福祉専攻の生徒がコミュニケーションを図る活動も参観させていただきました。いずれも高校生が家庭科で学んだ力を生かしている様子がうかがえました。

続いて、西脇高校に移動し意見交換会を行いました。それぞれの所属における現状を報告し合うとともに、これからの家庭科の発展と継続のために兵庫県のメンバーでどのような活動ができるか意見交換を行いました。まずは、各自の家庭科関係の会合等で、「生活やものづくりの学びのネットワーク」のリーフレットを配布して、周知を図っていくこととなりました。(兵庫県 永田智子)



◆事務局からのお知らせ

・会計より(会費納入について)

2014年度の会費の納入をよろしくお願ひします。会費納入状況・納入方法に関しては宛名用紙の裏に記載しておりますのでご確認を。

・庶務より

- ① 入会方法(お知り合ひの方々をお誘ひください)
「生活やものづくりの学びネットワーク」のHPから、リーフレットと入会申込書のダウンロードが可能です。
- ② 昨年度より県単位の活動が開始されています。ニュースレター送付先が活動県となっています。ニュースレター送付先と異なる県での活動をご希望の方は、事務局までお申し出ください。活動県代表の方の連絡先をお知らせします。
- ③ メーリングリストにご加入ください。職場や携帯電話は異動があるので、できるだけ自宅のパソコンのメールアドレスをお願いします。
- ④ ニュースレター送付先は原則、自宅住所をお願いします。ニュースレター送付先住所が変更になった場合は、お早めに事務局までご連絡ください。毎回20名ほど、返送されておりますので、ご協力のほどよろしくお願ひします。

事務局メールアドレス：seiktsu_nt@yahoo.co.jp

7月12日に第7期中央教育審議会委員に家庭科教育の充実に関する要望書を送りました。

河野公子

中央教育審議会は、中央教育審議会令に基づいて設置された文部科学大臣の諮問機関であり、教育の諸課題について審議している。現在、第7期中央教育審議会（平成25年2月15日～平成27年2月14日）は、会長安西祐一郎氏、副会長小川正人氏と北山禎介氏を含む30名の委員で構成されている。教育制度分科会、生涯学習分科会、初等中等教育分科会、大学分科会、スポーツ・青少年分科会の5分科会が組織され、各課題について審議している。初等中等教育分科会には、教育課程部会、教員養成部会、教育行財政部会、幼児教育部会、高等学校教育部会の5部会が設置されている。委員は、中央教育審議会委員の他、各部会の委員と臨時委員とで構成されており複数の部会で重複している。

今回の要望書は、中央教育審議会委員、初等中等教育分科会委員及び臨時委員、教育課程部会委員及び臨時委員、高等学校部会委員及び臨時委員の重複を除く合計71名にお送りした。

要望書は次のとおり。

平成26年7月12日

中央教育審議会委員 ○○○○ 様

家庭科及び技術・家庭科教育の充実に関するお願い

生活やものづくりの学びネットワーク世話人代表氏名印

「生活やものづくりの学びネットワーク」は、小・中・高等学校における家庭科、技術・家庭科における「生活やものづくりの学び」の重要性を広く国民の皆様理解していただくために、日本家庭科教育学会、(一社)日本家政学会、産業教育研究連盟ほか8団体と20名を超える呼びかけ人が集い、2010年9月に創設され、全国各地で総会、講演会、学習会などの活動をしております。

中央教育審議会において、今後の学校教育の在り方に関する具体的な検討が進められるに当たり、我が国の未来を担う子どもたちのために、家庭科及び技術・家庭科の充実へのご理解とご尽力をお願い申し上げ、以下のことを要望します。

1. 小学校における家庭科を第3学年から設置し、第3・4学年に35時間以上、第5・6学年に年間70時間の授業時数を確保していただきたいこと
2. 中学校の技術・家庭科における全学年各70時間の授業時数を確保するとともに、体験活動の充実と安全確保のための少人数指導を実施していただきたいこと
3. 高等学校の家庭科をすべての生徒に4単位必履修にいただきたいこと

【理由】

- ① 家庭科及び技術・家庭科は、よりよい生活を創造する力を育成することを目標とし、実践的・体験的な学習活動を通して問題解決能力を育てる「社会を生き抜く力の養成」の役割を担っている教科です。また、脳科学の研究では、10歳頃から急激に前頭前野が発達するといわれ、調理やものづくりなどの「手を使う学習」は小学校中学年から行うことが有意義です。
- ② 家庭科及び技術・家庭科は、第2期教育振興基本計画で掲げられた「自立」「協働」「創造」の理念を基に、少子高齢社会、男女共同参画社会、持続可能な社会、ICT社会、消費者市民社会に必要な力を育成しています。
- ③ 家庭科及び技術・家庭科は防災教育にも力を発揮しています。
日本家庭科教育学会では2011年の例会から2013年の大会まで「東日本大震災と家庭科」をテーマにしました。その中で、家庭科の学びが非常に役立っていることが報告されています。
- ④ 家庭科及び技術・家庭科の教育内容を十分に子どもたちの力として定着するためには、学習時間の確保が必要不可欠です。現状では、学習のための授業時間確保の課題は、子どもたちの生活にかかわる学びの保障問題だけでなく、教員の配置の問題、さらには教員養成の問題にまで及び深刻かつ困難な状況となっています。
なお、資料として、「生活やものづくりの学びネットワーク」パンフレット、「生きる力をそなえた子どもたち それは家庭科から」、日本家庭科教育学会リーフレットを同封致しますので、ご高覧くださいようお願いいたします。

生活やものづくりの学びネットワーク 第5回 講演会・総会のお知らせ

日時 2014年9月28日(日)14:00~17:00

時程 講演 14:00~15:30 (*講演 14:00~15:10、質疑 15:10~15:30)

総会 15:40~17:00

場所 聖心女子大学宮代ホール

東京都渋谷区広尾 4-3-1

東京メトロ日比谷線 広尾駅2番出口下車 徒歩3~5分

講演会

講師 落合恵子氏

(作家、クレヨンハウス主宰、東京家政大学人間文化研究所特任教授)

演題 「ていねいに暮らす…

その思想と姿勢」



◆プロフィール：1945年栃木県生まれ、株式会社文化放送を経て、作家活動に。社会構造的に「声の小さい声」をテーマにした作品多数。執筆と並行し、東京表参道、大阪江坂で子どもの本の専門店クレヨンハウス、有機食材の市場やオーガニックレストラン、安全な玩具などを集めたクーヨンマーケット等を展開。東京店では、女性の本の専門フロア、ミズ・クレヨンハウスも展開。

◆最近の主な著書：『母に歌う子守歌上下』（朝日新聞社）、『自分を抱きしめてあげたい日に』（集英社新書）、『てんつく怒髪……3. 11、それからの日々』（岩波書店）、『「わたし」は「わたし」になっていく』（東京新聞出版部）他、絵本の翻訳多数。

◆最近の活動：「さよなら原発 1000万人アクション」『戦争をさせない1000人委員会』呼びかけ人



生活やものづくりの学びネットワーク 事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚4-39-11 仲町YTビル3F 日本家庭科教育学会事務局気付

メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp FAX：03-3902-1668

ホームページ：http://www.geocities.jp/seikatsu_monozukuri_nt/